Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka 2015-05-16

APM news 128

秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館（旧北越銀行宮内支店）

〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8
TEL 0258-39-1233

第27回美術館大学 4月18日(土)am3:00～pm4:30／受講者：45名

「イラストレーション・ダイアログについて1」 講師：高橋庸平、伊藤彰剛、末房志野、高橋真理、秋山孝

秋山孝ポスター美術館長岡（APM）で開催中の第19回企画展「イラストレーション・ダイアログ」展 6年間の試み は、高橋庸平（東京工科大学助教、多摩美術大学非常勤講師）が継続的に開催している企画「イラストレーション対話展」の過去6年間の成果を検証する内容となっている。この企画は、高橋が毎回違うアーティストと、テーマを決めて作品を発表し合う2人展であり、毎回渋谷区神宮前にあるPATER'S Shop and Galleryにおいて開催している。今回のAPMでの展示では、高橋と過去の参加アーティスト6名（第1回 伊藤彰剛、第2回 末房志野、第3回 高橋真理、第4回 小川雄太郎、第5回 御法川哲郎、第6回 千田昇平）の当時の作品と新作を併せて展示をしている。

展示期間中には、この企画に関する美術館大学を2回開催する。参加アーティストと共に、前半・後半に分けて「イラストレーション対話展」の6年間を振り返り、そして検証していく。今回は、高橋（庸）、伊藤、末房、高橋（真）の4名を招き、館長・秋山孝が進行を務めた。5名の問答の中に「作品を通して行う対話（ダイアログ）」とは何かが見えてきた。

まず、第1回～3回の振り返りから始まった。第1回は、衝動的に始まったと高橋（庸）と伊藤は語る。彼らの、表現への探求心や作品を発表したいという情熱が、その衝動を起こしたのであろう。その衝動で始まった企画が、継続する企画に至った理由は、高橋（庸）の中に「作品を通して行う対話」の理想像があり、それに向かって進み続けている結果であると語った。伊藤、末房、高橋（真）もこの企画に参加するにあたり、それぞれに葛藤や苦しみ、そして反省があったそうだ。そして、展示に向けての作品制作中は、それぞれが相手のことを意識しているということがわかった。相手の事を知ろうとし、追求し、深く考える。それは、実際に会話はしなくとも、その意識自体が相手と対話をしているということになるのだ。そして、その過程を経て出来上がった作品を通しても、相手の本質が見えてくるという。言葉での会話は、時に偽りや虚勢が発生するが、作品にはそれができない。よって、実際に会話をするよりも、相手を理解できる対話方法なのではないだろうかと館長は分析した。また、同じ分野にいる人達を意識し、他者とは違う独自の表現方法を探求することが自分自身を見つめ直す機会にもなる。つまり、自分自身との対話にもなっているのだ。

最後に館長が、「イラストレーション・ダイアログ」は、言葉のやりとりとは全く違うプロセスで相手を理解しようとし、同時に自分自身も見つめているということがわかった。そして、それが従来の対話とは違う、魅力的なものであるということが理解できたとまとめた。

この検証は次回の美術館大学に続く。「イラストレーション・ダイアログ」についてより深く考察できる内容になるだろうという期待感と共に、今回の美術館大学は幕を閉じた。（たかだみつみ・APM学芸員）